



Title	源氏物語本文の研究
Author(s)	伊藤, 鉄也
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43192
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 伊 藤 鉄 也

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 1 6 6 7 8 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 14 年 3 月 12 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 名 源氏物語本文の研究

論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 伊 井 春 樹

(副査)
教 授 後 藤 昭 雄 助 教 授 荒 木 浩

論 文 内 容 の 要 旨

『源氏物語』本文は、昭和10年代の池田亀鑑による膨大な資料の調査の結果、大きくは藤原定家による青表紙本と、河内守光行・親行による河内本との二系統とし、その範疇外の諸本を仮に一括して別本と称した。この分類が今日も踏襲され、そのうちでも現存する諸本の大半を占める、青表紙本をテキストとする読みが、室町末期以来持続されているのが現状である。ただ、定家本とて鎌倉期までしかさかのぼることができなく、それ以前の本文の姿は、今日明らかにすることができない。ただ、その可能性のある本文としては、未整理のまま放置されている別本の存在で、これまで体系的にはほとんど研究がなされないままになっていたといってもよいであろう。『源氏物語』の研究は盛んで、年間の論文数も多いが、大半は作品論を対象とし、あまり成果のあがらない本文研究は、とかく敬遠されがちであった。そのような中であって、本論文は実態の知られない別本研究に果敢に取り組み、本文の意義について新たな問題を提起しようとする意欲的な内容となっている。

本論文は序章と2章からなり、第1章は「本文分別試案としての〈河内本群〉と〈別本群〉」として、第1節『桐壺』における別本群の位相以下5節、第2章は「諸伝本における表現様態と書写様態」として、第1節「新資料・伝阿仏尼筆本『桐壺』の位相」以下5節からなり、400字詰め原稿用紙に換算するとおおよそ900枚ばかりの分量である。序章『源氏物語』の研究状況と問題意識において、現在の本文研究が池田亀鑑以来60年余、ほとんど進展しないまま停滞しており、しかも無批判に定家本の大島本を利用する危険性を警鐘し、体系的な本文研究をすべきであると主張する。そのあり方の一つとして、別本の解明に取り組んだことを述べる。ただ、54帖揃った本文は存在しないだけに、巻ごとの諸本の比較をし、本文の異同が作品の内容とどのようにかわるのかを、人物描写、物語の展開などを通じて論じていく。結論的には、青表紙本も別本の一種であり、本文の整理としては、〈河内本群〉と〈別本群〉との二大別になることを提唱する。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

現代においてほぼ無批判に読んでいる青表紙本が、平安末期の『国宝源氏物語絵巻』の絵詞や別本の本文と内容を異にすることはつとに知られ、本格的な本文研究をすべきであるとの意見は出されていた。ただ、54巻という膨大な

分量と、鎌倉期の写本までしか伝存しなく、しかも揃い本は皆無という現実だけに、本文研究に手をつけるのは困難という状況でもあった。申請者はそのような中であって、早くから本文研究に取り組み、伝本の新たな資料の発掘、調査、意義の解明などに努めてきた。たとえば、澤標巻の別本の特色を知るのに、16本もの写本を対象とし、それぞれの本文の特色を明らかにするなど、きわめて精力的に新しい本文の調査に向い、それなりの成果をあげてきた。さらに、巻ごとの本文を文節単位に分解し、それぞれの伝本間の疎密の関係をグラフにして示すなど、統計的な方法を用い、より客観的な比較を取り入れる。古典文学においては、一語によって場面の解釈が異なる作品だけに、このような数値による処理は一面ではなじまない点も存するとはいえ、本文の性格を知る一つの方法ではあろう。

また、別本の国冬本だけが持つ、長文の異文の発見など貴重な成果は数多いが、それらはどのような意義が存するのか、別本の重要性を強調するものの、それでは今後青表紙本とどのように整合性をもたせて読むべきなのか、本文研究のあり方とともに、今後の課題は山積しているし、不満に思う点も多い。ただ、地道に本文研究に取り組み、現代の研究においてとかく等閑視しがちであった別本の存在を意義づけ、諸本の整理を進めたことは、高く評価すべきであろう。申請者の調査によって発見され、内容の明らかになった伝本も多い。このような次第で、本研究科委員会は、本論文を博士（文学）にふさわしい価値を有するものと認定する。